

En *Raten amerikan diasupora*. Tokyo (Japón): Akashi Shoten.

Okinawenses en Argentina. Proceso de diaporización como reacción contra la globalización.

Onaha Cecilia y Gomez, Silvina Beatriz.

Cita:

Onaha Cecilia y Gomez, Silvina Beatriz (2010). *Okinawenses en Argentina. Proceso de diaporización como reacción contra la globalización*. En *Raten amerikan diasupora*. Tokyo (Japón): Akashi Shoten.

Dirección estable: <https://www.aacademica.org/silvina.gomez/30>

ARK: <https://n2t.net/ark:/13683/px4E/v0x>



Esta obra está bajo una licencia de Creative Commons.
Para ver una copia de esta licencia, visite
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.es>.

Acta Académica es un proyecto académico sin fines de lucro enmarcado en la iniciativa de acceso abierto. *Acta Académica* fue creado para facilitar a investigadores de todo el mundo el compartir su producción académica. Para crear un perfil gratuitamente o acceder a otros trabajos visite: <https://www.aacademica.org>.

在外アルゼンチン人はディアスポラか？：欧州・米国・アジアの事例から
セシリア・オナハ (Cecilia Onaha)
シルビナ・ゴメス (Silvina Gómez)

はじめに：移民受け入れ国から移民送り出し国へ

1. 時期区分
2. アルゼンチン移民を対象にした研究動向
3. 在外アルゼンチン人の現状
4. 海外におけるアルゼンチン人コミュニティをめぐって：ディアスポラの形成プロセス
おわりに

はじめに：移民受け入れ国から移民送り出し国へ

現在、約百万人のアルゼンチン人が国外に在住しているものと推計される。しかし、従来アルゼンチンは移民送り出し国ではなかった。それどころか、1815年から1930年にかけては、米国に次いで世界で第二の移民受け入れ国だった (Ferenczi & Willcox 1929 - 1931)。

アルゼンチンにおいて先住民はヨーロッパに対抗して独自の文化を維持することができず、ヨーロッパからの入植民が自分たちの組織および搾取形態を押し付けた。国民の基準として出生地主義をとることにより、移民を根付かせるために出身地にかかわらずアルゼンチンで生まれた子どもを自動的に国民として認めることにした。つまり、すべての入移民にとってアルゼンチン国籍を取得するかどうかは選択肢のひとつだった。したがって、国籍を取らないからといって差別の対象となることはなく一政治参加の権利からは排除されるが一、むしろ反対に、徴兵の義務から除外されるというメリットがあり、それが出身地の国籍を決して放棄しない動機ともなった。このような状況によって、アルゼンチンは異なる出身地のディアスポラ的コミュニティの形成および文化的アイデンティティの保持がしやすい環境になった。

第二次世界大戦後は、海外からの入移民の動きはなくなり、代わりに国境を接した国々からの入移民が増加し、さらにその後、逆にアルゼンチンからの出移民が目立つ時期へと突入した。20世紀後半には、欧米諸国においてアルゼンチン人コミュニティの形成が取りざたされ、特にヨーロッパ諸国へは二重国籍をもったアルゼンチン人がアイデンティティ回復のためというよりは明らかに外国人として生活条件の改善のために移民していった。

本章では、こうしたテーマに関する主要な研究業績についての紹介・議論から始めたい。全体としては、次のような目標をもっている。第一に、グローバルなディアスポラ状況の歴史と現状を、出身地から現在に至るまでの歴史的なプロセスの足跡を辿りながら明らかにするという、本プロジェクトの提案への応答をすること、である。そして、第二に、アルゼンチンのケースを研究対象とした場合に浮かび上がってくる問題群に関する議論の深化に貢献することを目指したい。

したがって、まずはアルゼンチンにおける移民の歴史について時系列的な紹介をする。史的プロセスを分かりやすくするため、ごく簡単に時期区分をすることによって、どのよ

うな経緯で移民受け入れ国から移民送り出し国となったのかを述べる。さらに、その結果としてのアルゼンチン人在外コミュニティについて、「ディアスポラ」ということができるのかどうかを議論する。在外コミュニティとしては、米国・イタリア・スペイン・韓国・日本のケースを取り上げる。

1. 時期区分

1816年の独立以降、半世紀にわたって国家形成プロジェクトをめぐる党派対立が続き、政治的迫害が引き起こされ多くの亡命者を出すことになった。1830年代半ばには既に移民受け入れ政策が始まったが、1880年から1930年の間にアルゼンチンは世界有数の移民受け入れ国になった。1914年のセンサスでは、全人口の30%が外国生まれだった。同時期は際立って取りざたされてきたが、こうした大量移民を保持することはできなかった。

アルゼンチンの歴史を通じて、経済的動機に限らず様々な理由で母国を後にせざるを得なくなるアルゼンチン人は後を絶たない。最も有名などころでは、独立指導者ホセ・デ・サンマルティン（Jose de San Martin、1850年フランス・Boulogne Sur Merで死亡）、一九世紀アルゼンチン・ナショナリスト指導者フアン・マヌエル・デ・ロサス（Juan Manuel de Rosas、1877年英国・Southamptonで死亡）、アルゼンチン憲法の思想的基盤を提供したフアン・バウティスタ・アルベルディ（Juan Bautista Alberdi、1884年亡命先のフランス・Neully Sur Seineで死亡）を挙げることができる。その他にも、ロサス政権下で迫害を受けてモンテビデオに亡命したフアン・ホセ・ビアモンテ（Juan Jose Viamonte、1843年）、イシドロ・ラモン・スアレス（Isidro Ramon Suarez、1846年）、マルティン・ロドリゲス（Martin Rodriguez、1845年）、フランシスコ・コスメ・アルゲリッチ（Francisco Cosme Argerich、1846年）らは、みな独立戦争の英雄である。ただし、彼らを現在言うところのディアスポラに含めることはできない。

また、アルゼンチンが大量の移民を受け入れたことは事実だが、帰還した移民の数も非常に多い。1875～1894年の間に出国した人数は、同時期の総入国者数の57%にのぼる。同様に、1895～1914年の間は63%、1915～1934年の間は79%にも及ぶ（Ministerio del Interior de Argentina. Dirección Nacional de Migraciones 1974）。

これだけのデータから推定することはできないが、上記期間の一部においては農作物の収穫期だけの季節労働者としての移民が一般的だったことが分かっている。また、帰還した移民のうち、どのくらいの割合が成功者だったか、さらにアルゼンチンへの滞在が文化的アイデンティティの変容を引き起こしたかどうか、といったことは分からない。ただし、アルゼンチン滞在期間があまりに短く、ヨーロッパ移民が大量に存在したことを考慮に入れるなら、アイデンティティへの影響はほとんどなかったであろうと思われる。

19世紀末から20世紀初頭にかけてのアルゼンチンは、社会的にも経済的にも急激な変容を遂げる只中であつた。初期のミドルクラスが現れて、何よりも富める者と貧者の間に大きな格差があつた。農牧業生産によって生まれた巨万の富によって、ヨーロッパの主要都市に居を構える大富豪もいた。典型的なのは、アルベアール家（familia Alvear）である。先祖はスペイン出身で植民地官僚としてアメリカ大陸に派遣され、子孫はアルゼンチン史

上由緒ある地位についてきており、そのうちの一人は大統領になった。上記の期間、アルベアール家にとってパリは第二の故郷と考えられていた。パリには、アルベアール家と姻族となったアルゼンチンのゴンザレス・モレーノ家 (Gonzalez Moreno) も住んでいた。さらには、ブエノスアイレスの貴族として著名なエンリケ・デ・アンチョレナー一家 (Enrique de Anchorena) もいた。彼は、パリで安心して生活するために 1922 年ブエノスアイレス県で 5 万ヘクタールの土地を売らなければならなかった。ホルヘ・ラナタ (Jorge Lanata) によれば、土地を売った金は、アルゼンチン人の銀行であるスペイン銀行パリ支店を通じて送金された (Lanata 2002:347-348)。

こうした人々とは全く異なり、特に 20 世紀後半には、移民として出国することを余儀なくされた人々もいる。

アクティスとエステバン (Actis & Esteban) が行った時期区分によれば、近代国民国家建設・組織の初期段階に続いて、輸入代替工業化期 (1930~1975 年) がやってくる (Actis & Esteban, 2007: 205)。この時期、工業化と急激な都市化によって以下の状況が現れた。1) 海外からの移民の減少。2) 農村部から都市部への急激な人口移動。3) 国境を接する国々からの移民増加。4) 「頭脳流出」と呼ばれる高学歴アルゼンチン人の出移民の始まり。

続く第 3 期 (1976~1983 年) は、新自由主義的政策開始期といえよう。輸入代替工業化期に発展してきたミドルクラスが、急激な経済政策の変更により収入および生活レベルの低下に直面することになり、国内移民は減少した。他方、国境を接している国々からの移民は、一旦激減したものの、すぐに増加に転じた。また、正確なデータはないが、同時期にアルゼンチンからの出移民は明らかに増加したものとみられる。

第 4 期 (1983~1989 年) は短いが、民主化および再分配プロジェクトの失敗によって特徴づけられる。国際金融機関の経済施策が押し付けられた時期でもある。農村から都市への人口移動も再開され、国境を接している諸国—特にペルー—からの移民も増加した。最後の独裁制下で出移民していた人々の一部が帰還したが、同時に海外への出移民も主に経済的な理由から続いた。

第 5 期 (1990~2001 年) は、長期負債への組み替えからネオリベラル経済モデルの危機の時期までである。同時期の GNP (国内総生産) の成長率は 3.2% で、明らかにその前の時期よりは改善して、1994 年にはインフレ率も 1.6% にまで下がり物価が安定した。しかし、1995 年から新自由主義経済モデルの効果は、失業と貧困レベルの増加によって、無に帰した。実質給料は 1974 年比の 47% となり、2002 年には失業率が 19.7% にも上った。人口移動に関しては、国内移動はストップしたが、外国からの移民は低下しながらも引き続き、外国への出移民については特に 1995 年以降流れが止まることなく、2001 年に史上最多の出移民を記録している。

1950 年から 1970 年代半ばの間、アルゼンチンからの出移民数は入移民数を越えることはなかったが、1975~1985 年間の軍政下に政治暴力の増大によって出移民数が入移民数を越えることになった。1983 年、民主制に戻ると入国者数が増えて出国者数が減った。

1990~1994 年間には、二つの現象が合流した。ハイパーインフレによる出国とその後 1992 年以降達成された安定化による出国の減少である。外国からの移民は、経済のドル化

によりラテンアメリカ地域で最も高い給料を獲得できるという理由で増加し続けた。

1995～1999 年間には、メネム大統領政権下の経済危機によって、1950～1970 年代の記録を越えるそれまでに見られない規模の出移民をだした。ここでの出移民の動機は、純粋に経済的なものといえる。2000～2003 年現在には、アルゼンチン史上最大の出移民を出し、入移民も減少したことから、2002 年には出移民数が入移民数を上回った (Actis & Esteban 2007:205-258)。

2. アルゼンチン移民を対象にした研究動向

アカデミックな世界では、1950 年代末にはアルゼンチン人の出移民が懸念されるテーマとして現れていた。しかし、注目されたのは科学者・専門職の人々であり、限定的な出移民構造に関してで、社会・心理的側面からの扱いはなかった。さらに、議論の中心は教育コストについてだった。当時は、こうした出移民現象の原因について、1950～1960 年代にラテンアメリカのほぼ全域において経済発展が続くものという期待に乗じて教育サービスが顕著に拡大したためであると認識された。しかし、1970 年代の世界的不況と 80 年代の累積債務危機によって、経済発展は阻害された。そのため、この間には専門職の人的資源が過剰となった。とはいえ、既存の教育が過剰だったというわけではない。現在に至るまで、非識字人口や就学困難児童の問題は大きい (Maletta 1998:499-502)。

信頼に足る情報はないが、1960～1970 年の間に 18 万 5 千人のアルゼンチン人が出移民して、1980 年代には 20 万人に上ったものと見られる。主な移民先は、米国およびスペインである。

アルゼンチン外務省のデータによれば、2002 年現在の在外アルゼンチン人人口は 58 万 7,005 人に上る (Novick 2005, 2007)。これが、2005 年には、イスラエルおよびブラジルも主な移民先に加わり、90 万 9,180 人にまで増加した (La Nación, 2005 年 5 月 29 日)。

スサナ・ノビック (Susana Novick) の研究によれば、1869 年に初めてのセンサスが行われ全アルゼンチン人口は 187 万 7,490 人であったが、これには 4 万 1 千人の国外在住人口が含まれていた (Novick 2005:25)。しかし、アルゼンチンが国家として、在外人口—特に高学歴人材資源の流出—の数を憂慮するようになるのは 1950 年以降のことだといえよう。以降、一連の国家組織が出現する。具体的には、1965 年の 7558/65 政令による「科学者・専門職・技術者・熟練労働者の移住に関する特別研究委員会」、1984 年の 1798/84 政令による外務省内「在外アルゼンチン人の帰還のための全国委員会」などがある。

その後、2001 年には外務省内に在外アルゼンチン人課が創設された。また、2003 年にブエノスアイレス市には入移民および出移民に対する支援センターが創設され、同市の市民保護局 (Defensoria del Pueblo) は、法律・労働・学術・経済・文化面での情報を移民となる可能性のある市民に提供するようになり、在外アルゼンチン人の書類手続きの便宜を図るようになった。また、アルゼンチン教育省内に在外アルゼンチン人学者との交流促進を目的として R@ices (Red de Argentinos Investigadores y Cientificos en el Exterior) と称するプログラムが 2003 年に実施された (Novick & Murias 2005:18)。

1991 年にはアルゼンチン議会で 24.007 法が成立し、事前の投票人登録を条件にして国外

在住アルゼンチン人に投票権が与えられることになった。同法が適用されたのは 1993 年選挙が初めてであり、8,823 人が登録した。

法制面においては、「移民奨励法 (Ley General de Fomento de las Migraciones)」が軍政下で承認されて 1981~2003 年に適用されていたが、アルゼンチン人の出移民現象を考慮に入れたものではなかった。しかし、2004 年 1 月に承認された新法では、「在外アルゼンチン人について」という題名のついた章が含まれている。これによって、アルゼンチン政府がアルゼンチン人の居住している国家との間で、受け入れ国における労働者と同等の労働権および社会保障権が保障されるよう協定を取り結ぶ権限が与えられた。こうした協定では、在外アルゼンチン人による家族扶養のための母国への送金が保証されている。さらに、アルゼンチン人居住者に対して制限を設けて相互主義の原則を著しく損なう国家の国民に対しては、同法によって与えられる利益の停止ができることになっている。また、二年以上国外に居住していながら、帰国することを決めた全てのアルゼンチン人に対して、所轄の当局が決めた金額まで、母国に持ち込む仕事用・私用・家庭用財に対する関税を優遇する規定もある。

では、アルゼンチンの研究者らは、出移民現象について、どのように評価しているのだろうか。

評価の立場を二つに分けることができるかもしれない。一つは、エクトール・マレッタ (Hector Maletta) に代表される楽観主義的立場である (Maletta, 1988)。出移民は国家にとっての労働力損失および教育コストの垂れ流しという古典的な批判に対して、マレッタは同現象を質の高い労働力のみならず広い意味での労働力の需要と供給という枠組みで経済的視点から評価するべきだと言っている。いくら質の高い労働力だろうが、それを巧みに使うことのできる資本がない限り有効ではないという。つまり、出移民を損失とみる代わりに、潜在的資源とみることを提案している。しかし、この提案が有効であるためには二つの軸に基づいた移民政策が実施されなければならないだろう。一つは動機を与える軸で、移民に出た人たちが社会的・感情的なつながりを母国との間に保持するためのものである。もう一つは、運用技術上の軸で、母国のためになる在外アルゼンチン人の様々な活動を支援する具体的なパイプを創設するためのものである。例えば、学術組織、企業家団体、社会組織、人道組織などの諸活動が考えられる。

二つ目の立場は、スサナ・ノビックが表明しているややネガティブな見方である (Novick 2005:23-24)。ノビックによれば、アルゼンチンの現人口動向の特徴からみて出移民現象は深刻な影響をもたらす。特徴を具体的にいうなら、全体的な人口成長の低さ、早期の出生率低下・高齢化の進行、死亡率低下の下げ止まり、移民による人口増加の減少、若者の移民増加、都市への人口集中である。

ヨーロッパへの移民は、人口の高齢化に対応した、世界の経済成長に必要なものとなっている。つまり、ヨーロッパにおける移民制限政策は、皮肉にも、移民を法的に境界線上に置き、不安定な状況に留めておくことによって、人権が十分に保障されない弱い立場の従属的労働力を確保するための戦略となっているようにみえる。

上記の状況に、アルゼンチンが経験した発展モデルおよび人口の流れを対置してみると、人口動向は政治プロセスに依存した変数の一つだというノビックの仮定を支持することに

なるのではないだろうか。

ラテンアメリカからの出移民の流れは、新たな国際労働分業およびどんどんと不公正になっている国際秩序というコンテキストにおいて分析されるべきだ。そこでは、失業率、社会の分断化、排除を増大させるような施策がとられている。こうした危機に直面して、人々は生き残り戦略として移民するしかないところに追い込まれているのに、この状況を作り出した国々は国境を閉鎖して、移民問題を単なる国境警備の問題として扱おうとしているのである。

ノビックは、アルゼンチンの移民政策における矛盾を次のようにまとめている。長年にわたって、アルゼンチンは国境を接している諸国に対して移民の流入を制限する政策をとってきたが、成果ははかばかしくなかった。ここにきて、アルゼンチン国家としてアルゼンチン人移民を、外交ルートを通じて、「保護」しようとしているが、思うような成果をあげていない。

アルゼンチン国土に居住することを希望するすべての人々を受け入れることを憲法で宣言していた国が、今では自国が提供しない働く機会のある外国へと若者を送り出す国になっている。いずれにせよ、状況がまったくネガティブだとはいうわけではなく、移民に関する新法や新たに作られつつあるモデルにはポジティブな期待を持つことはできる。それらが、こうしたアルゼンチンにとって戦略的問題の解決のために、より民主主義的な空間を創造するのに貢献しているからだ。

3. 在外アルゼンチン人の現状

では、アルゼンチン人はどこに移民したのだろうか。そして、その移民先を選んだ基準はどのようなものだったのだろうか。家族のルーツは何か関係しているのだろうか。アルゼンチンに定住したディアスポラとの関係はどうだろうか。移民先におけるアルゼンチン人にはディアスポラとしての特徴がみられるのだろうか。

米国への移民

米国を移民先として選んだ人々の場合、ほとんど帰還することがなく、純粋な出移民である。米国への移民は、1960年代に始まり、2001年の政治経済危機以降目立つようになった。初期の移民に関する先行研究は、主に成功した知識人や科学者を扱っている。このグループに特徴的なのは、白人支配者層の模倣をする伝統的なモデル・マイノリティのステレオタイプに近づくことで、そのために同グループよりも経済的に恵まれない困難に苦しむ人々を隠蔽することになるだけでなく、労働機会や保健サービスへのアクセスのために障害となる言語の壁をも隠してしまうことになる (Viladrich 2007:263)。2000年のセンサス・データによると、正規の在米アルゼンチン人は10万864人であるが、非正規滞在者は約40万人に上るものと推計された。集住地域は、カリフォルニア、フロリダ（特にマイアミ市）、ニューヨークである。

ニューヨーク在住のアルゼンチン人は、ミニ・スーパーマーケットを経営する韓国人や靴磨き組合を組織しているブラジル人などとは異なり、特定の職業に限定されたコミュニ

ティは形成していないが、1960年代からクィーンズやマンハッタン地区に定住した。地理的には分散していたが、市内に「アルゼンチン・コーナー」と呼ばれるような商売や共同組織などの特徴ある場所があったことは分かっている。

移民組織は、社会経済階層、世代、メンバーの文化的関心などによって多様だ。最も極端な例は、米国とアルゼンチンの間での専門職・学者の交流組織である。同様に、両国間のビジネス促進をする米亜商業会議所、科学・技術・文化発展のための米亜協会などがある。もう一方の極には、より低い社会階層に属している移民による共同体的組織があり、「共同体の精神に基づくディアスポラのフィランソロピー」の発展を通じて、アルゼンチンにおける多様なグループや組織を支援することを主な目的としている。その資金集めのために、様々な社会・文化的イベントを組織している。ビラドリッチ (Viladrich) によれば、こうした組織のほとんどが巡回クラブのようなもので、米国におけるヴァーチャルな共同体慰問の役割を果たすものとされる。確かに目立たずほとんど調査されていないが、こうした組織がニューヨークにおけるアルゼンチン文化遺産の創造に最も貢献している。これが可能になっている主な背景には、シンボリックで宗教的な行為の再評価がある。例えば、毎年10月に行われるヒスパニック・パレード、50年前に遡るニューヨークへの「ルハンの聖女 (Virgen de Lujan)」到着を記念したミサ、雑誌「Imagen Argentina」、新聞「De norte a sur」のような地元メディアを通じたアルゼンチン人集会などへの参加を挙げることができる。

上述の二つの流れは、相互補完的ではなく、階層の利害によって分離したままだといわれる。より恵まれた階層は、ニューカマー移民をめぐる状況を改善するための支援をしないと非難される。反対に恵まれない階層の組織リーダーたちは、こうした社会連帯を促進することによって個人的な栄誉を追及しているだけのさもない人間であると非難される。このようにアルゼンチン人の連帯という点では、相互扶助を促進する形での資源へのアクセスにおける共同の利害や相互の期待が一枚岩であるどころか、人間関係における変わりやすい共同・競争・抑圧のダイナミズムによって構成されている。相互扶助関係にも対価があるが、これはあらかじめ決められてはいない。例えば、移民歴の長い「先輩」が後にやってきた「後輩」の住居や仕事を探すのに、アルゼンチン人コミュニティやインフォーマル経済へのアクセスを通じて、手助けする道義的責任があるとされる。しばしば、こうした好意は、(困り込まれた安い) 労働力の獲得に活用されるが、「後輩」としては「先輩」への忠誠と感謝を期待されることになる。

このように、エリート組織が米国の支配的文化への同化をしようとするのに対して、共同意識の強いグループは他のエスニックグループに刺激されたラテン性の表象と同調するような「小さなアルゼンチン」をつくらうとする傾向がある。

同グループの研究からは、相互扶助の特定のやり方に関する異なるレベルのディスコースを考慮に入れた新しい理論枠組みをつくる必要があることがわかる。エスニックグループや国民の集団に関して、同質的で調和的だという前提を見直して、「想像された共同体」のメンバーを結びつけると同時に切り離すような階級・ジェンダー・文化・世代の違いを考慮に入れる必要がある。

ヨーロッパへの移民

イタリアへの移民に関しては、ハビエル・グロスutti (Javier Grossutti) の研究で示されているように、一般的に考えられているのに反して、必ずしも「帰還移民 (return migrants)」とはいえない (Grossutti 2005)。マレッタ&レポレ (Maletta y Lépo-re, 1997) によれば 1990 年時点におけるアルゼンチン人家族の 40% はイタリア系祖先をもっているように、イタリアからの移民はアルゼンチン社会に大きな足跡を残しているが、アルゼンチンからイタリアへの移民の流れが必ずしも「故郷への帰還」を動機としているわけではない (Maletta y Lépo-re, 1997: 87-88)。

イタリアへの移民を対象にして、なぜイタリアを移民先に選んだのかという理由を尋ねたグロスuttiの調査では、イタリアに親族のつながりがあることによる利点の可能性および就労機会の良さが挙げられるものの、「アイデンティティの回復のため」という回答はなかった。同調査は、フリウリ (Friuli) 地方に定住しているイタリア系 2 世・3 世・4 世アルゼンチン人を対象にしており、彼らがイタリア市民権をもち同地方に親族をもっているにもかかわらず、である。さらには、アルゼンチンにいたときからイタリア系アルゼンチン人コミュニティへの帰属意識さえなかった。そうであるなら、アルゼンチンにおけるイタリア系住民を「移植されたヨーロッパ人」と考えるべきではなく、ヨーロッパにおける価値観や習慣などを根本的に変化させた独自の特徴をもつ人々として扱うべきであろう。

シュナイダー (A. Schneider) も言うように、だからといってアルゼンチン人が同質的なアイデンティティを共有しているということの意味しているわけではなく、期待される以上にアルゼンチン・アイデンティティが強くて、受け入れ国との断絶した特徴によって、イタリア人またはイタリア系アルゼンチン人としてではなく、アルゼンチン人であることを意識せざるをえないのだといえよう (Schneider, 2000: 297)。

同じようなケースがスペイン系である。スペイン内務省データによると、2004 年 1 月までの時点で 4 万 3,347 名 (全外国人人口の 2.6%) のアルゼンチン人正規滞在者がいるが、非公式的には不法滞在者は 11 万人に上るものと推計している。これは、スペイン在住の非正規滞在外国人グループとして最大規模となっている。アルゼンチン人のスペイン入国者数は 2002 年がピークで、12 万 8,312 名の入国に対し、1 万 8,742 名の出国記録しかない (Goldberg 2007: 117-118)。

ヨーロッパの中でもバルセロナは最もアルゼンチン人が集中している都市である。正規滞在者は約 1 万人であるが、非正規滞在者は約 5 万人に上る。正規滞在者の中には、スペインおよびイタリアとの二重国籍者は含まれていない。うち 47% は 25~39 歳にあたり、40% は高等教育を受けた人々である。つまり、在バルセロナのアルゼンチン人は最も貧しい階層の人々ではなく、他の「第三世界」出身者に比較して、より多様な労働市場に参入していることになる。さらに、受け入れ社会からは「好意」、「親近性」、「類似性」によって異なる対応をされており、特にカタルーニャ人はアルゼンチンへの関心と敬意を抱いている。アルゼンチン人移民の出国理由の主なものとは労働問題であるが、母国では自らの学歴にみあった仕事に就くことができず結果として相対的に低収入であった

スペイン社会への参入パターンは多様である。まずは、正規滞在者と非正規滞在者の間には断絶がある。また、スペイン国籍を持っている場合は、疑いの余地なくずっと確実に

効率的な参入ができる。移民ネットワークを活用して、情報を得る他、交通費の工面・書類整備・雇用と住居の獲得のために親戚・友人・同郷者の物的援助を受ける場合もある。イタリア系アルゼンチン人の中にはスペインへの移民を選んだ者もいる。いずれにせよ重要なのはヨーロッパ諸国の正規滞在者としての書類を整えることである。こうしたルートを持っていない場合は、他の戦略をとる。例えば、「結婚」や観光客ビザで入国する「短期労働者」となることである。ゴールドバーグ (Goldberg) が示した興味深い若者のケースがある。彼は、夏の間アルゼンチンの観光ビーチでアクセサリー (指輪、腕輪、首飾り、ペンダントヘッドなど) を売って資金を貯めると、7月には (季節が逆になる北半球で) ヨーロッパの夏のビーチに向かい、規制の比較的緩いスペイン・バレアレス諸島で同じ行商スタイルを続ける (Goldberg 2007:131)。

こうした周縁的な移民に対して、いわば「ファーストクラス」の移民もいる。40~64歳の年代で1990年代に米ドルで資本を蓄えた小規模実業家である。最初は状態の悪い場所を借りて改装を重ねるほか、アルゼンチンで獲得していたフランチャイズの権利を活用する場合もある。彼らは、メネム政権下で生まれた「ニューリッチ」で、他のアフリカ系・ラテンアメリカ系移民に対する人種差別主義者的な発言・態度表明をする。アルゼンチン人の中には、こうした人々から遠ざかる人、あてこすった嘲笑をする人、激怒する人などもいるが、同調者もいるという具合に多様である。このような「アルゼンチン人であること」は、植民地支配から引き継いだ被支配層に押し付けたモラルや考え方を再生産するオリガルキー層のヘゲモニーと根本的に関連している (Goldberg 2007:133)。

バルセロナ在住のこうした最近のアルゼンチン人移民に出国した動機を尋ねると、アルゼンチンの国民性とされる「クリオーリオ的ずるさ (picardía criolla)」、「友人優先主義 (amiguismo)」に対する拒絶反応がみられる。第二には、増加傾向にある街頭での暴力を挙げ、第三には貧困化・社会階層の二極化が挙げられる。

アルゼンチン人のイメージについては、スペイン人—特にカタルーニャ人—からみれば、「不平不満だらけの生活をする人たち」ということになる。逆に、アルゼンチン人にとってのスペイン人イメージは、リオ・デ・ラプラタ副王領時代から尊敬に値する20世紀のガリシア人移民労働者の時代にわたるまでの長い時間をかけて形成されたものである。特にカタルーニャ人に対するイメージは「冷たい」とされる。この点に関しては、ゴールドバーグがエセックス大学のイタリア人教授ルッジェロ (V.Ruggero) の研究に言及しているように、「アルゼンチン人はスペイン語を話すイタリア人だ」とまで言われるアルゼンチン社会にイタリア移民が与えた影響の大きさを考慮に入れる必要がある。

スペインの若者世代は、世界共通のグローバリゼーションの影響を受けた消費主義で受動的・順応主義的性格をもっているが、アルゼンチン人はなぜスペインを移民先に選ぶのか。スペイン社会の良いところはどこか。こうした質問への回答としては、アルゼンチン社会においていまだに力を持ち続けているカトリック的モラルの制約 (具体的には麻薬使用や墮胎に対する罰則に現れている) に対するスペイン社会における個人の自由が挙げられている。しかし、ゴールドバーグによると、個人の自由と評価するよりは、抑圧された大人の社会をつなぐ社会問題に対する全くの無関心・保守主義・希望の欠如を反映したスペイン社会の現状というべきものである (Goldberg 2007:139)。アルゼンチン人の自由に

対する評価の高さは、顕著な団結を示すセネガル人移民のケースに対置すると明らかである。

韓国への移民

では、アルゼンチン育ち・生まれのアジア系コミュニティの「帰還移民」のケースではどうだろうか。アジア系は、アルゼンチンにおけるエスニックグループとしての特徴が明確な「目に見えるマイノリティ」である。ここでは、韓国系および日系アルゼンチン人のケースをみてみよう。

韓国系の場合、受け入れ社会との接触によるアイデンティティの変化のプロセスがみられる (Mera 2007)。対話によって、他者に対して自分の民族的つながりを強固なものにすることによって母文化を維持する必要が強調され、アイデンティティの再定義が必要になる。

アルゼンチンにおける韓国系コミュニティのメンバーが韓国に「帰還」して遭遇するのは、自らの行動パターンとは異なるヘゲモニックな文化である。1.5 世 (幼少期に韓国からアルゼンチンに移民したため、移民 1 世でありながらもアルゼンチンで社会化のプロセスを経たケース) や 2 世の場合、自分の二重文化性だけでなく、韓国への帰属性がないことを再確認している。こうした状況を共有した人々は、ディアスポラの産物としての特徴をもつグループとしての自覚が促される。ブラジル、アルゼンチン、米国といった異なる環境で育った韓国系の人々は、出身社会、受け入れ社会およびディアスポラとしての生活経験からくる一連の価値観を内面化している。このように、1974 年ごろから韓国系コミュニティがトランスナショナルな側面を見せだしたが、1990 年代末から 4 回にわたり行われている HANA 大会はその典型例であろう。同大会は、お互いを知ることが目的にブラジル、アルゼンチン、チリおよびパラグアイの韓国系大学生が集まり、それぞれの社会における韓国系をとりまく現実について議論が行われた。

メラ (Mera, Carolina) による韓国系の人々の言語に関する見解が興味深い。大人になってからの移民は韓国語を保持するが、子どもたちは教育を受けた国での言語に多様なかたちで適応することが確認されている。具体的には、米国・日本・ブラジルの 2・3 世は韓国語を使うことができなくなる傾向があり、アルゼンチン・チリおよび旧ソ連諸国ではバイリンガルになる傾向が強く、パラグアイのように居住地の言語に適応しない例もある (Mera 2007:167)。

韓国への再移民はエスニックな要因によるものと考えてよいのだろうか。再移民の理由は、経済的なもの、教育問題、家族の事情などさまざまだが、いずれにせよエスニックな理由が関係していることは確かだろう。ただし、アルゼンチンから韓国へ「帰還」した韓国系の人々は、「違う韓国人」とみられるようだ。そのため、二つの異なる反応が生まれる。一方では、アルゼンチンの特徴をなくすことで韓国人の模倣をする人々がいて、他方では故郷においても外国人であることを認める人々がいる。メラによれば、こうした反応は以下の要因によっている。すなわち、①アルゼンチンにおいて達成していた統合レベル、②グローバル社会の組織への統合レベル、③韓国系コミュニティ・ネットワークへの参加度、である。アルゼンチン・米国・スペインに代表されるような他の国での生活・人生を

選択することができたにもかかわらず、あえて韓国を選んだ二重文化をもつ若者は、アルゼンチンにおいて「異種混交的社会性」をもった空間を共有できた若者である。彼らは、アルゼンチンの食べ物、におい、遊行、ライフスタイル、友だちに対する強い郷愁を感じている。事実、大部分はアルゼンチンとのつながりを維持して、休暇や親族訪問のためにアルゼンチンを定期的に訪問している。アルゼンチンの保守的な韓国系コミュニティにおいては普通の行動が、韓国に近年移民した若者たちにとっては文化的ショックである場合もある。言語面では就労・教育上の参入に問題はなくても、感情面での困難を抱えている場合もある。困難への対処としては、海外から来た仲間たちを集めて、二重または多文化状況での世界の再構築を行うケースが見られると同時に、多大なコストを払いながらの「韓国化」を追求するケースもある。

韓国系に関するメラの結論は、ブルベイカーの提案と対応したものになっている(Mera 2007: 332-336, Brubaker 2005)。このケースに関してはディアスポラとして扱うのではなく、ディアスポラ的姿勢・プロジェクト・需要・言語・慣習として扱うほうが適切であろう。それぞれの異なるコンテクストにおけるコミュニティのカテゴリー化に伴う対立や交渉を描き出すのは、こうした意味合いにおいてである。恒久的にシンボリックな神格化された実体である先祖の土地に対する言及がされるコミュニティがなければ、ディアスポラとしての条件を満たしていないと、メラらは評価している。

日本への移民

アルゼンチンにおいて比較的歴史の浅い韓国人移民に対して、日本人移民は百年を越す歴史をもつ。現在の日系コミュニティメンバーに関する正確な統計データはないが、およそ5万人と推計され、うち20%が日本国籍をもち、その他に2世から4世までが含まれている。また、沖縄県出身者が占める割合の大きさも、アルゼンチン日系コミュニティの特徴となっている。

ヨーロッパ系アルゼンチン人と同様に、経済的危機の時期に出移民先として祖先の地を選んだが、初めの頃は短期間の移民のつもりだった。ノビックの研究によれば、日本はスペイン同様にダイナミックな移民の動きがみられる国になったが、労働市場への参入機会および給料面において日本全国どこでも同じような状況を示したわけではなかった。また、スペイン系・イタリア系同様、日系アルゼンチン人にとって故郷は日本という自分に好都合な就労機会を提供してくれる地域への架け橋として捉えられた。第二次世界大戦以前のアルゼンチンへの日本人移民は、一般的にはチェーン・マイグレーションの形をとった多様な目的地への自由な移民であった。つまり、ディアスポラ的な人口移動といえる。しかし、戦後は、単純な移民の形をとるようになった。ただし、コミュニケーション手段の発達によって出身地と新たな居住地が、または居住地同士が、むすびつけられていった。例えば、ドミニカ共和国への日本人移民がパラグアイに再移住させられた後に、最終的にアルゼンチンへとやってきたケースがある。こうしてアルゼンチンに定住した移民は、パラグアイや日本にも親戚をもち、お互いに頻繁に連絡をとりあっている。また、第二次世界大戦終結によってフィリピンや台湾から引き揚げざるを得なかった沖縄出身者が、沖縄の土地を占領されてボリビアに再移民して、そこからアルゼンチンにまで再移民したケースもある。

韓国系のケースと同様、全米州のカナダからアルゼンチンにいたるまでの様々な国の日系コミュニティが1970年代末以降、コミュニケーションを取り合うようになり、共通のアイデンティティに関わる要素を基礎にしたつながりを確立して、1981年にはパンアメリカ日系協会を結成した。

また、沖縄系コミュニティの「ディアスポラ化」が、1990年沖縄県のイニシアチブによって組織された世界の沖縄移民とその子孫の代表による国際大会（世界ウチナーンチュ大会）によって活性化された。これは、ここ数十年の間に進行してきた動き—日本社会の国際化、海外日本人移民と日系コミュニティが日本と受け入れ国との関係性強化に向けて提供してきた支援の再評価—を活性化するものとなった。

沖縄系アルゼンチン人のケースに関しては、時系列的にみて、2つの大きな「帰還」グループがある。一つは、1970年代半ばから80年代末までに帰還したグループで、もう一つは1990年以降の日本における非熟練労働への参入を可能にした入管法の改定に乗じたグループである。

前者には、戦後の移民でアルゼンチンでの経済的発展が当初想像したようには見込めないと判断して、ちょうど経済的にも帰還に有利な状況であったために、短期間のうちに帰還した人々もいた。また、完全に日本式の教育を子どもに受けさせたいという理由で帰還した人々もいた。

さらには、1972年の沖縄本土復帰直後の県費による留学生としての来日後、そのまま定住してしまったケースもある。このようなケースは1980年代半ばにむけて増加したが、それは県内での市町村レベルで類似の奨学金制度を実施するようになったことが原因である。

既述したように1990年の移民に関する法改定によって日本の労働市場への日系人流入ブームが始まった。

当時、日本では非熟練労働力への高い需要があつて、日系アルゼンチン人はこの市場への参入のために自らの出身を活用したが、その多くは戦前移民や戦後直後の移民の子孫である2世・3世である。主な移民先は大きな産業都市で、それは沖縄の親族と緊密な関係にないことと沖縄が労働市場としては魅力的ではないからだ。にもかかわらず、沖縄に移民したケースもあり、その場合の理由は明らかに文化的親近感の強さ—方言、食べ物、音楽、生活のリズムとスタイル—であり、親戚関係の強さも含まれた。沖縄県以外の出身県をもつ日系アルゼンチン人で、沖縄に定住しているのはごく例外的ケースであり、ほとんどは沖縄系である。

筆者が1999~2000年に沖縄で行ったフィールド調査では、さまざまなケースに出会ったが、中にはアルゼンチンに移民した後に帰還した人々も含まれる。移民先で成功したために帰郷したとは限らず、1922年生まれのMNさんもその一人だった（注1）。

晩年を生まれ故郷で過ごすには、日本が国家としておよび社会としても医療サービスや生活支援を受けることのできる利点をもっており、帰還の主な理由となる。こうしたケースでも、HTさんのようにアルゼンチンとのつながりは健在である（注2）。

戦後移民にとっては、アルゼンチンの経済的不安定性と政治的動乱が帰還を決意する主な理由であった（注3）。

また、沖縄のアルゼンチン人のケースでも、メラが韓国系のケースで示したのと同様な、1.5世の事例がみられる（注4）。また、アルゼンチンで生まれた2世にも類似の経験をしているJGさんのような場合がある。

JGさんはアルゼンチン生まれの日系2世で、1985年に沖縄に来た。両親の故郷を知るために仕事をやめて来日した。いくつかのアルバイトをしているうちに、スペイン語を勉強していた現在の妻に出会う。彼女の支援によって、アルゼンチンでの仕事だったアートに従事することができた。ある全国コンクールで作品が入賞したことによって、日本の景気が良い時期に様々なチャンスが訪れた。彼の作品は沖縄の公共の場に展示されているが、ブエノスアイレスの多くの遊歩道を含めてアルゼンチンでも展示されている。

沖縄が日系アルゼンチン人アーティストの成長にとって沖縄は良い場所といえるかという質問に対して、JGさんはそうとは思わないと答えた。その他の活動についてもそうだが、上下関係によって制限されているという。さらに、以前なら企業は広報のためにアーティストを支援するだけの豊富な資金を持っていたが、こうした資金額は増えるどころか減少している。

アルゼンチンで懐かしいのはブエノスアイレス市、カフェ、コリエンテス通りの散歩だが、一番最近の旅行ではアルゼンチン経済の悪化が目立ち、一回に1ヶ月以上は滞在したいと思わなくなったという。

だからといって、妻と子どもがいても沖縄が最終目的地というわけでもない。自分が生まれ育ったのではない土地で生活する緊張感を、旅することによって少しは減らすことができる。日本に滞在して17年になるが、いまだに「どこかへの途中」であるように感じ続けているという。

高学歴移民のなかには、アルゼンチンで大学を卒業した後に、日本でも成功したケースもある（注5）。

このように来日した人たちが皆、日本社会に統合されていったわけではなく、大部分の人たちは非熟練労働のサービス業に就くことが多い。興味深いことに、こうした状況を「過渡的なもの」とは捉えずに、家族をつくって根を下ろす決意をしたケースもある（注6）。

また、バラエティ豊かなケースのなかでも、日系アルゼンチン人の親のもとに生まれながら、幼少期または思春期に日本に定住する目的で連れてこられた1.5世日本人ともいべき人たちの存在にも言及すべきだろう（注7）。

こうした事例から、ヨーロッパにおける帰還移民の経験を生かす可能性などの面での違いを指摘できるだろう。ただし、学歴が高くなるほど労働市場に参入する可能性が広がるという点などの共通性もみられる。（とはいえ、日本のデカセギと呼ばれるケースに関してはその限りではない。）

では、沖縄にはアルゼンチン・ディアスポラが形成されているといえるのか。原則的には、調査事例から見る限り、受け入れ社会における統合の度合いに違いはあるものの、アルゼンチンを自らの出身地として多かれ少なかれ言及している。また滞在期間にもよるが、帰還移民のなかにアルゼンチン文化への多少の接近がみられる。

4. 海外におけるアルゼンチン人コミュニティをめぐって：ディアスポラの形成プロセス

在外アルゼンチン人の増加によって、核となるような団体が形成されてきた（Aguirre, Graziadio & Mera 2007）。その特徴や組織の仕方は多様であるが、いずれにせよ受け入れ社会においてアルゼンチン人が統合を遂げていくにつれ自分たちの出身を思い出すようになったということだろう。

連続的な出移民の波を構成していたのは、異なる出国条件をもった社会経済・文化的にも多様な個人である。初期には高学歴者が大多数を占め、徐々により雑多な人々を含むようになった。こうしたなかで、1950年代半ばにできたのが初期の団体で、次第に新しい世界での統合および出身国とのつながりの保持にとって、団体を作ることが重要な戦略であることが分かってきた。それぞれの団体の目的や発展プロセスは様々で、登場したのと同じくらいの簡単さで消滅してしまうものも多かった（Aguirre, Graziadio & Mera 2007:76）。

こうした団体の80%は、ヨーロッパと北米（米国・カナダ）に集中している。主だった団体の60%は、米国、スペイン、イタリアにある。一般的には在外アルゼンチン人個人やグループのイニシアチブで誕生している。中には、地元の公的機関によって認められているものもある。

最初はインフォーマルな集まりやレクリエーション活動などから始まり、ネットワークを広げ、結果として団体を形成しているケースが多い。ほとんどの場合、ナショナル・アイデンティティを共有していることを条件にグループをつくるが、移民としての立場を共有しているラテンアメリカ人や外国人一般に開かれたグループとなることもある。

団体としての所在地をもち、法人化し、役員会および活動の明確な指針などを持つまでに至った団体もある。いずれにせよ、団体によって物理的に目に見える存在となり、個人およびグループにとっての社会的意味をもつものとなっている。

アギーレらの調査によると、こうした団体は社会・文化的に重要な特徴をもっており、在外アルゼンチン人の間で母国の習慣や伝統を保持するための社交・コンタクトの場を形成しているだけでなく、アルゼンチン文化を受け入れ社会において普及させる役割も担っている（Aguirre, Graziadio & Mera 2007:78）。

まとめるなら、こうした団体は出移民の祖国喪失や孤独の苦しみを一時緩和させるか抑止する役割を果たしていると言うことができよう。それは、例えばアサード（アルゼンチン風焼肉）やマテ茶を楽しむ会、サッカー、独立記念日祝賀行事などのような、団体の内輪に向けた活動によって可能になっている。また、受け入れ社会におけるアルゼンチン文化の普及は、アルゼンチン映画週間や芸能披露などの活動を行うことによって果たされている。このような活動はすべて、アルゼンチンと受け入れ社会の間での対話のチャンネルを創るという課題を達成するためのものと言うことができる。こうした団体活動の中心を占めるのは出身地の習慣を守るための活動であるが、受け入れ社会から孤立しないようにすれば統合を妨げるものとはならないと考えられる。むしろ、お互いの文化に対する認識を高めることによりお互いの文化を両立させて統合を進める試みと言うことができるだろう。

既存の団体に関する研究によれば、団体メンバー向けの活動に重点を置いているものが目立つが、それは、母文化への帰属意識の活性化を重要視しているためと解釈できる。興味深いことに、一般的にはこうした団体は特定の政治的・イデオロギー的立場には立たない。ただし、アルゼンチンや受け入れ国の国家組織に対して仲介者的役割を果たそうとするものもある。また、出身地の伝統文化の救済・再構築・再評価の活動をするなかで、アルゼンチン人移民への認識・可視性が高まり、受け入れることができるようなアルゼンチン／人に対するステレオタイプを形成している。

こうした団体のもう一つの主要な特徴としては、社会連帯の精神である。具体的には、公共善に資する組織に対する支援・献金キャンペーンを行ったりする。こうした特徴をもつ団体の過半数は2000年以降に出現しているが、その前に団体が出来ていたものに後から活動目的に連帯が加わったものもある。こうしたネットワークを活性化するのにインターネットは画期的メディアとなった。

具体的に、沖縄在住アルゼンチン人団体の例をみてみよう。2000年に沖縄アルゼンチン協会が創設された動機は、沖縄在住の日系アルゼンチン人の正確な数の把握であった。日本政府は外国人在留者の数を把握しているが、日系人というカテゴリーに含めて考えられるアルゼンチンに長年にわたって居住しているが帰化していない人、二重国籍の2世、日系アルゼンチン人で日本に帰化した人については、人口としては異なるカテゴリーでの登録をされるわけではないので、正確な把握ができないのである。沖縄は、地理的に日本列島の本州から離れており、人口が沖縄本島に集中しているため、こうした試みをするのに適当だと考えられたのである。当時、公刊されている統計データによると、沖縄県在住のアルゼンチン人は85名であった。

これに対して、沖縄県における唯一のアルゼンチン人の団体である沖縄アルゼンチン協会では、個人または世帯主または家族構成メンバー個人の名義からなる総計180名の会員リストが作られた。ただし、協会員になるための基準が明確でなく、例えば日本人に関してはアルゼンチンに住んだことがあるかどうかや、住んだとしたらどの位の期間なのか、単にアルゼンチンに移民に出た親族をもつ人たちなのか、明文化されていたわけではない。

同協会は、もともと沖縄県出身者またはその子孫で沖縄に再移民した人々によって創設されたのだが、興味深いことに大掛かりな活動は行ってきていない。主な活動は、創設時および1998年の日本・アルゼンチン国交開始百周年記念のアサード祝賀会くらいのもので、通常の活動はほとんどない。これは、ブラジル協会・ペルー協会などの他のラテンアメリカ人コミュニティとは対照的だが、メンバー間での対立が原因なわけでもない。

メンバー間の対立ということでは、沖縄の人とアルゼンチン人の間の価値観の違いに起因する文化的問題—世代の問題がある。社会経済的階層の違いは、確かに存在するが、問題になるようなものではない。

本州の中心的産業都市などに在住の日系アルゼンチン人に関しては、詳しい調査を行ったわけではないが、文化的な特徴から明確に二つのグループに分けられる。一つは仲介業者の人々で、もう一つは非熟練労働者のグループである。後者は主に高学歴

の若年層が多く、前者の大部分は中程度の学歴だがアルゼンチンへの移民1世で、日本語ができるためにもう一つのグループより上位に立てる人々だ。

さらに、日本に留学生として入国して学問に従事しながら定住することになった知識人もいる。ただし、大変限られた人数のため公式に団体を作る必要には迫られず、新参の留学生に対してインフォーマルな形で支援をするサークルのようなものを形成しているにすぎない。近年になって、その数も増加してお互いのコミュニケーションも活発化してきたため、留学生協会（以前留学生だった人も含む）が作られ、在東京アルゼンチン大使館に本部が置かれた。

つまり、団体は母国文化が明瞭に表現されていることは、注目に値する。したがって、団体の活動の中心となっているのは、アサード（アルゼンチン風焼肉）やマテ茶を楽しむ会、タンゴ、フォルクローレ音楽などである（Aguirre, Graziadio & Mera 2007:86）。

おわりに

ここまでの考察で分かったことは、ひとつの「アルゼンチン・ディアスポラ」が形成されているとは言えないが、「ディアスポラ的」態度が形成されているということだ。帰還移民や出身地と移民先を行ったり来たりするような移民が、必ずしも同じプロセスの一部を成しているわけではないだろう。ディアスポラというアイデンティティを支えていると従来考えられてきた出身地コミュニティとのつながりは、在外アルゼンチン人のなかに広くみられるが、異なる移民先における在外アルゼンチン人同士とのつながりはみられない。これは、他のラテンアメリカ人のケースとは異なる。しかし、グローバリゼーションの矛盾した影響がみられる点では共通している。つまり、国境にまたがって人々が拡散しているが、文化的要因による社会経済的格差が拡大しているのである。

同郷者団体はナショナル・アイデンティティが外在化した一つの形態であるが、その集団が「ディアスポラであること」を表明している。しかし、国民国家のあり方に対抗するものというよりは、むしろ出身国政府によって奨励されることも多い。アルゼンチンの場合、移民がもたらす利益を保証し、平等な扱いをアルゼンチン国民に保障することは、国家の発展を目的としている。沖縄県の場合も、限られた経済的資源しかもたない島嶼なので、移民およびその子孫という海外の人的・社会的資源による発展の可能性を広げる試みを行っているということが出来る。移民受け入れ国の状況に関しては、必要に応じた機能を果たす限りにおいて、移民の流れを奨励したり、管理を厳しくするが、結局のところ、それぞれの移民グループのアイデンティティを強化するだけのことだと言えよう。

(注)

(1)MNさん(男性)は、1922年生まれ。一人で帰郷したが、詳しいことは明らかにしようしない。確かなのは、短時間の働き口での収入で出費を賄える程度の静かな生活を送っていることである。日本人でありながら、アルゼンチン人とはブエノスアイレスなまりのスペイン語を話す。ブエノスアイレスを懐かしみ、那覇市でも最も賑やかな地域のファーストフード店で午後4~6時半の間、コーヒーを飲みながら通行人を眺めて過ごす。妻はヨーロッパ系だったが、亡くなったという。妻との間に一人の息子をもうけ、孫も何人かいるが会ったことはないという。彼に関するミステリアスな噂がアルゼンチン人コミュニティでは出回っていて、過去の事件で生まれ故郷の島に避難せざるをえなかったのだということになっている。確かに、日本の経済状況の安定性によって忍従できる孤独な人生の晩年を過ごすために帰還する人々も存在するだろう。

(2)HTさん(女性)は1936年に結婚したが、直後に夫はアルゼンチンに移民して、戦争のために離れ離れの生活が1951年まで続いた。戦争の間、大阪で働かされたが、14歳にして神奈川県川崎市に出向き4年間にわたって働いた経験をもっている。アルゼンチンでの長年にわたる生活の後、彼女が61歳になったとき90歳の父と84歳の母の希望で、沖縄に里帰りした。その際、夫と船に乗って生まれ故郷の港を眺めて、その美しさに魅せられて、晩年を沖縄で過ごすことを決意した。HTさんの夫は、アルゼンチンでの生活一特に食事一をととも懐かしがり、時々牛肉を買ってアサード(アルゼンチン風炭火焼き)をしたそうだ。数年前に夫が亡くなってからは、彼女の小さな店を訪ねるアルゼンチン人とスペイン語で話すことが楽しみの一つだという。アルゼンチンには彼女の兄弟の子どもたちがいる。

(3)TIさん(男性)は1962年に沖縄の海外青年移住プロジェクトの一環でアルゼンチンに移民した。アルゼンチン在住沖縄人所有の田舎にある別邸で3年間働いたが、首都に移りいくつかのクリーニング店で10年間にわたって働いた後、ブエノスアイレス県の南東部にあるトレス・アロヨス(Tres Arroyos)に自分の店を開くことができた。イサベル・ペロン政権末期に近い、最も国内での政治的動乱の烈しい時期、インフレに打ち勝つことができず、沖縄に帰る可能性を考えるようになった。それは、二人の子ども(当時7歳と4歳)が学齢期に達していたことも関連した。子どもの将来を考え、子どもたちが「アルゼンチンの奇妙な習慣」を身につけ、理解しあえなくなることを恐れ、帰郷を決意した。沖縄での24年間の生活と労働によって、アルゼンチンで「失った年月」を取り返し、今では移民に出なかった同年代の人たちと同じレベルの生活をしている。アルゼンチンでの経験を苦々しく思っているわけではなく、沖縄アルゼンチン協会の再活性化のために若い日系アルゼンチン人を支援している。

(4)SHさん(男性)は両親および兄とともにアルゼンチンに移民した。若くして両親を亡くしたため、兄とともに帰国を決意した。帰国したときは25歳独身だったが、親戚から聞かされた日本と沖縄の素晴らしさに胸をふくらませていた。しかし、1977年7月に帰国してすぐに夢から醒めた。沖縄中部の出身だが、当時の田舎ではまだ道路も舗装されておらず、街灯や下水道も整備されていなかった。村のある家で老人が表の裸の蛇口でシャワーを浴びているのを見たことがあるほどだった。

アルゼンチンでは、航空飛行士向けの工業高等学校を卒業している。パイロットになるのが夢だったが、経済的事情が許さなかった。

日本語はまったく分からなかったため、日本にきてから本州にまで行って日本語の勉強をした。千葉県で就職し、その後叔父が経営する小さな企業のある大阪に移った。家族の事情で沖縄に戻り、今は沖縄に根を下ろしている。仕事の関係で看護士の妻と出会い、二人の子どもがいる。12年間働いた後、自分の土地を買って家を建てた。子どもの教育に関しては「アルゼンチン式」を守り、アルゼンチンの理想的なイメージを子どもに伝えている。彼の夢は、いつか家族を「母国」に連れて行くことだ。

(5)AGさんは1986年に両親の母国の文化を学ぶために3ヶ月間の滞在予定で来日するつもりだった。家族が宜野座村出身なので、初めての村主催の奨学生募集に応募したのだ。当時、大学で心理学を専攻、卒業して6年が過ぎて働いていた。職場からは奨学生になったら3ヶ月間の休職許可はもらえることになっていた。応募者の中で彼女ほどの条件をそろえた人はいなかったが、驚くべきことに合格しなかった。それは、女性だから、という理由だった。宜野座村当局としては、初めての奨学生プログラム実施にあたって、女性の奨学生を迎えるという準備ができていなかったのだ。

思ってもみなかった展開によって、試練がもたらされたが、それでも沖縄に行くという決心をした。両親に行きの航空券だけを援助してもらい、奨学生たちと一緒に行き、帰りの航空運賃が払えるように働くという計画だった。アルバイトを始め、最初は日系アルゼンチン人が運営している語学学校で日本語を勉強したが、その後琉球大学でも勉強した。1年滞在して、帰国するのに十分な貯金もできた。しかし、滞在中に日本で働く可能性がみえてきて、アルゼンチンで働くよりもずっと魅力的に思えた。それで、身辺整理のために一旦帰国したものの、すぐに日本に帰ってきた。学問の世界にはあまり魅力を感じなかったので、起業した。現在は日本人女性のパートナーと新しい翻訳会社を運営している。

AGさんとは異なる事例をもう一つ挙げておく。

SYさん(女性)は大学で生化学を専攻していたが、途中退学していて、両親に沖縄へ行ってみたらどうかと勧められた時は、プログラム作成の勉強をしていた。当時は、仕事もなく、どうしてよいのか分からなかったという。

1986～7年の間、沖縄で日本語の勉強をした。1年後に帰国して、ブエノスアイレスの医療保険会社に雇われた。日本に帰る気はなかったが、1990年に父親が日本に行って病気になり入院しなければならなくなり、医者に外科手術が必要だと言われた。そこで、母親が先に、その後SYも来日した。滞り期間がどんどん延びるので、働き始めた。沖縄のある企業で研修生として働きながら、大学に入って国際文化学学士を取得した。その後、行政とかかわりのある財団での仕事を得た。1年前に父親が日本での生活に耐えられなくなり、母親と一緒にアルゼンチンに帰った。SYは急に仕事を辞めたくないということで沖縄に残ったが、今後どうするつもりか尋ねると、まだ決めていないが安定した仕事を探しているということだった。

(6)MIさん(女性)は、1988年に沖縄の伝統舞踊を習って師範の資格を取ってアルゼンチンで教えるつもりで来日した。当初はそんなに難しいことだとは思っていなかったが、来日してみると思った以上の期間が必要だと分かった。そのうち現在の夫と知り合い、5人の子どもをもうけた。5番目の娘が数ヶ月前に生まれたばかりで、現在は子育てに従事している。今はMIさんの母親も那覇の小さいアパートに同居している。MIさんは小さな頃から日本語を勉強していて、来日当初は上手く話せなかったが、今では日本語のコミュニケーションに問題はない。母親とは時々スペイン語を使うので、子どもにも教え始めたが、あんまり興味がないようだ。アルゼンチン料理を良く作るが、子どもたちも大好きだ。子育ては大変だが、忍耐が続かないと思ったときにはアルゼンチンの有名なコメディアンであるホルヘ・コロナ(Jorge Corona)のカセットを聴くと落ち着く。MIさん夫婦はホテルのサービス部門で働き、小さなつつましいアパートに住んでいるが、日本のミドルクラス家族の多くが抱えるような文句もない幸福な家族生活を送っているようだ。

(7)ESさん(男性)は、アルゼンチン生まれだが、12歳のときに両親が沖縄に変える決心をした。1983年に3人の兄弟と共に期待に胸ふくらませて日本に来た。帰還の動機を尋ねると、マルビーナス戦争(フォークランド紛争)のせいだという。アルゼンチンでは、大ブエノスアイレス圏のサンミゲルに住んでいた。

当時、ESさんの一番上の兄は大学生になっていて、二番目の兄は中学3年生、ESさんが小学6年生、一番下の妹が幼稚園を終えたばかりだった。来日してすぐに、両親と長男は帰国のために借金をした母親の親戚にお金を返すために働き始めた。

ESさんのケースは成功例といえよう。彼と二番目の兄は日本で大学を卒業して良い就職口を得た。兄はセメント会社で働き、ESさんは沖縄に二つある銀行のひとつで働いている。これも両親と大学での勉強を続けなかった一番上の兄のおかげだ。妹はミッション系短期大学を卒業して就職したが、沖縄県の普通の若者らしい道を歩んでいる。

ESさんは来日後もスペイン語を勉強し続けたので、どちらの言語もマスターしている。この点が妹との違いだが、妹はスペイン語を自分も含めて兄弟が友だちの前で使うことを恥ずかしがった。ES自身も、大学に入ってラテンアメリカからの留学生と出会うまで、コンプレックスを払拭できなかったという。以来、沖縄在住の日系人に対する支援活動を続けている。

ただし、日本の友人たちにとっては同じように見えても、ESさん自身は会社が要求する調和の尊重や集団行動の規律にはついていけないと感じる。例えば、仕事の後に上司や同僚と飲みに行く習慣に関して、日本人は飲めるかどうかを問題にしているのではなく、グループの和を乱さないという条件をクリアできるかどうかを問題にしていると感じる。

昨年は、1年間にわたって米国で勉強して働く研修期間を得て、人間としての成長ができるずっと自由な世界を知ることができた。その経験に基づいて、今の仕事を辞めて米国に留学することを考えている。

(文 献)

- Actis, Walter y Fernando Esteban, “Argentinos hacia España (‘sudacas’ en tierras ‘gallegas’): el estado de la cuestión.” in Novick, Susana (ed.). *Sur-Norte. Estudios sobre la emigración reciente de argentinos*, Bs.As., Catálogos – Instituto de Investigaciones Gino Germani, Universidad de Buenos Aires, 2007: pp.205-258.
- Aguirre, Orlando; Florencia Graziadio y Gabriela Mera, “Asociaciones de Argentinos en el exterior”, in Novick, Susana (ed.). *Sur-Norte. Estudios sobre la emigración reciente de argentinos*, Bs.As., Catálogos – Instituto de Investigaciones Gino Germani, Universidad de Buenos Aires, 2007: pp.63-92.
- Bonifazi, Corrado; Ferruzza, Angela, “Mujeres latinoamericanas en Italia: una nueva realidad del sistema de migraciones internacionales.” in *Estudios Migratorios Latinoamericanos*, no.32 (abril, 1996): pp. 169-177.
- Brubaker, Rogers, “The ‘diaspora’ diaspora”, in *Ethnic and Racial Studies*, Vol.28 no.1 (January, 2005): pp.1-19.
- Butler, Kim D (2001). “Defining Diaspora, Refining a Discourse.” (en: Diaspora, 10:2).
- Cacopardo, María Cristina, “La emigración potencial de jóvenes italoargentinos”, in *Estudios Migratorios Latinoamericanos*, no. 22 (diciembre, 1992):pp.453-495.
- Castellanos Ortega, Mari Luz, “Si te parás a pensar, perdimos. Relatos de vida y expectativas frustradas de la inmigración argentina en España”, in *Estudios Migratorios Latinoamericanos*, no. 22 (diciembre, 1992): pp.363-412.
- Clifford, James, *Itinerarios transculturales*, Barcelona, Gedisa, 1999.
- Cohen, Robin, *Global Diasporas*, Seattle, University of Washington Press (1997).
- Ferenczi, Imre y W. Willcox , *International Migrations. Vol.1 and 2* New York, National Bureau of Economic Research, 1929-1931
- Gil Araujo, Sandra “Periféricos a la conquista de la metrópolis. Panorámica sobre las (in)migraciones latinoamericanas en España.” in *Estudios Migratorios Latinoamericanos*, no.60(agosto, 2006): pp.291-341.
- Goldberg, Alejandro, “Tu, sudaca”. Las dimensiones histórico-geográficas, sociopolíticas y culturales alrededor del significado de ser inmigrante (y argentino) en España. Bs.As., Prometeo, 2007.
- Grossutti, Javier P., De Argentina al Friuli, Italia (1989-1994)¿un caso de migración de retorno?”, in *Estudios Migratorios Latinoamericanos*, no.56 (abril 2005): pp.97-121.
- Lanata, Jorge, *Argentinos. Tomo I*. Buenos Aires, Ediciones B. (2002).
- La Nación* (29 de mayo, 2005)
- Maffia, Marta M. “Dimensiones diaspóricas de la comunidad caboverdiana en Argentina”, in Maronese, Leticia, comp. *Buenos Aires Negra. Identidad y cultura*. Temas de Patrimonio Cultural, no. 16) (2006)..
- Maletta, Héctor, “Del pasivo al activo: una política para los emigrados de América Latina.” , in *Estudios Migratorios Latinoamericanos*, no.10 (1988):pp.497-521.

- Mera, Carolina, *Globalización e identidades migrantes. Corea y su diáspora en Argentina*, Tesis doctoral inédita, 2007
- Ministerio del Interior de Argentina Dirección Nacional de Migraciones. Resumen estadístico del movimiento migratorio en la República Argentina. Buenos Aires, 1974
- Novick, Susana y María Gabriela Murias *Dos estudios sobre la emigración reciente en la Argentina*, Buenos Aires, Instituto de Investigaciones Gino Germani (UBA). Documentos de trabajo no.42. (2005).
- Onaha, Cecilia “Japoneses en Argentina y nikkei argentinos en Japón: El rol de la identidad nacional y étnica en el proceso de integración de los nikkei argentinos en Okinawa.” Trabajo presentado en el X Congreso Internacional de ALADAA, Universidad Cándido Méndez, Río de Janeiro, 2000.
- Palazon Ferrando, Salvador , “Latinoamericanos en España (1981-1994) Aproximación a un fenómeno migratorio reciente.” in *Estudios Migratorios Latinoamericanos*, no. 32 (abril, 1996): pp.179-210.
- Schneider, Arnd. Future Lost. Nostalgia and Identity among Italian Immigrants in Argentina, Bern, Peter Lang, 2000.
- Velázquez, Patria Román, “La migración latinoamericana hacia Londres y transformaciones del espacio urbano.” in *Estudios Migratorios Latinoamericanos*, no.54, (agosto, 2004): pp.339-355.
- Viladrich, Anahí “Los argentinos en los Estados Unidos: los desafíos e ilusiones de una minoría invisible”, in Novick, Susana(edt.).*Norte-Sur. Estudios sobre la emigración reciente de argentinos*. Bs.As., Catálogos – Instituto de Investigaciones Gino Germani, Universidad de Buenos Aires, 2007 : pp.259-296.
- Yelvington, Kevin “Dislocando la diáspora: la reacción al conflicto italo-etíope en el Caribe, 1935-1941.” in *Estudios Migratorios Latinoamericanos*, no.52 (2003) : pp.555-577.

(翻訳:山脇千賀子)